37. 腱鞘巨細胞腫の3例

山岡 昭義，斉藤 隆，国井光隆
大内純太郎，矢作龍二（船橋中央）
加藤 之康 （加藤整形）

今回我々は，手指の腱鞘より発生した巨細胞腫の3例を経験したので報告した。症例は28歳から43歳までの主婦で，いずれも無痛性腫瘤を主訴として来院した。罹病期間は3週から3年であり，いずれも骨変化は認めなかった。腱鞘巨細胞腫は組織像が多彩なため，病名の統一を欠くが，線維性組織球腫の一亜型とすべき腫瘍と考えられた。治療は，切開を大きくし，腫瘍の全貌を知り，正常な腱鞘をも含めて全摘出すべきであると考えた。

38. 抗癌剤感受性診験の最近の動向

保高英二，高田典彦，梅田 透
（千葉県がんセンター）
時田尚志，藤本修一（同・研究局）
遠藤富士乗（船橋医療センター）

39. The use of allografts for giant cell tumor

S. I. Esses (Toronto General Hospital)

40. Fixed head and bipolar hip endprostheses
——米国留学帰国報名——

山 縣 正 庸（塩谷病院）

1969年から1981年までに Mayo Clinic で行われた股関節人工骨頭置換術1001例についてそのX線学的所見及び臨床成績を fixed-head 型，bipolar 型に分けて検討した。特に acetabular wear については長期経過例において有意に bipolar 型の方に wear が少なかった。臨床成績の重回帰分析によると患者の年齢，体重，疾患により長期成績が影響を受けるが，bipolar 型が fixed-head 型よりも有意に優れていた。

〔特別講演〕
腰部脊椎管狭窄症の診断とその病態生理学的検討における最近の知見について

玉 置 哲 也（千大）

42. 変形性肘関節症に対する関節形成術症例の検討

望月真人，西川 悟，渡辺英詩
（渡辺整形外科）

当院で施行した，肘関節形成術は，最近10年間で25症例，25関節であり，今回直接検診しえたのは，11症例であった。これらに対して，疼痛及び可動城の改善度，労働能力，更には患者の満足度について調査し，術式について若干の考察をした。疼痛は全例に，ほぼ消失，可動域は，術前−31°～100° が，術後−21°～125° と改善，原業に復帰した者73%であった。満足度では，73%が非常に満足していた。以上の如く，予後は非常に我々にとって満足すべき結果であったが，術後経過レ線では，肘の変形性変化は，coronoid fossa を中心に全例術後も進行していた。そこで最近我々は，肘頭窩窓開け術を従来の方法に加えて施行している。

43. 小児化膿性股関節炎の検討

品田良之，篠原寛休，藤塚光慶
佐久間博，大復英夫，平松健一
豊田明宏 （松戸市立）

過去13年間に経験した22例の小児化膿性股関節炎のうち17例につき検討報告した。治療法の組み合わせは，基本的には抗生剤の全身投与，関節穿刺洗浄，関節切開，介達牽引であり，結果は片田の分類にて優12例可5例であった。考察としてこの疾患の登場のしかたにより，超早期急性型，いわゆる急性型，亜急性型，いわゆる陳旧型の4つに分けて検討するとともに，早期診断治療の重要性と関節穿刺，切開などに加えて基本的には抗生剤の全身投与が極めて重要な投割を持つことを強調した。

44. 人工股関節手術症例における骨シンチグラフィーの検討

清水 耕，大井利夫，木村 純
大西正康，増田純男，林 輝彦
（上都賀）

人工股関節置換術後，骨シンチグラフィーを施行した21例26関節に検討を加えた。経過良好例では，臼蓋側 zone Ⅰ及びⅢ，大腿側 zone 1及び7に均等な集積をみた。Loosening 例では，術後早期には臼蓋側 zone Ⅰ又はⅢ，大腿側 zone 1又は7に，長期経過後には臼蓋側 zone Ⅰ，大腿側 zone 7に高度集積をみるものが多く，その集積部位は，X線上の loosening 部位の対側に存在する傾向が認められ，これは骨代謝の変化を反映しているものと考えられた。

45. 当院で施行した RA に対する人工関節，人工骨頭置換術並びに関節形成術について

寺師裕彦，重広信三郎，宮本和寿
染屋政幸 （県立東全）
清水完次郎 （大綱整形）

18症例35関節の内訳は，Neer 骨頭置換術3関節 Swa-